学苑　第八九八号　二〜一三（二〇一五・八）

口語歌人青山霞村の伝記事実解明の試み

中西　裕

1．青山霞村とは

青山霞村は短歌を口語で詠んだ最初期の歌人である。経歴を簡略に記すと以下のようなことになる。

明治七年六月七日に京都深草の霞ケ谷に生まれる。本名青山嘉二郎。同志社に学ぶも中退、一時東京に出るが、病気のため帰郷。明治三四年正月に関西学院で口語短歌を創始。明治三六年に渡米、三八年病気のため帰朝。三九年に最初の口語歌集である『池塘集』を刊行。大正八年、雑誌『からすき』を創刊。昭和一五年二月没、享年六五。著作には、他に『深草の元政』、『草山の詩』、『面影』、『詩歌学通論』、『山本覚馬』、『京物語』、『ブロンテー女史』、『同志社五十年裏面史』などがある。

この人物について、ある程度まとまった形で生涯をたどって書かれたものとしては次の二点が存在する。

河野仁昭「同志社人物誌　六一　青山霞村」[1]

河野仁昭「青山霞村」[2]

同志社社史資料室長を務めた著者の筆になるだけに、伝記的事実について教えられるところが多々あり、基礎資料として貴重である。しかし、同志社所蔵分を含めて、霞村の著作資料を十分に利用して書かれたとは言い難い。

本稿は、不明とされてきた霞村の伝記上の諸点につき、主として従来使われずにきた資料を用いて、事実を明らかにしようとする試みである。

2．従来使われずにきた資料

霞村の伝記調査にあたって、利用すべくして使われずにきた資料が存在する。その一つは『米国苦学実記』であり、もう一つは霞村が主宰した雑誌『からすき』に当人が執筆した多くの文章である。

前者については、使われずにきた理由が明確である。著者名が形影生となっていて、一見霞村との関わりが不明であり、さらに早い時期に書かれた霞村の略歴の一つには正しい書名が記してあるにもかかわらず、後年、『米国苦学雑記』と誤記されているものが流通してしまったからである。霞村の歌集である『池塘集』（初版）を収録した『現代短歌全集』第一巻に掲載された新間進一執筆の解題が、誤記をしてしまっているのである。[3]しかし、戦前の図書『現代短歌全集』二一巻（昭和六年）に掲載された、霞村自身が書いたと思われる「略歴」には正しい書名が見える。[4]

自筆と考えられる略歴に本書が明示されている点から判断して、これを霞村の著書と見てよいと思われるが、ただ、本文には混乱を引き起こす記

述がある。アメリカのある家庭で著者が家事労働をしている際に、その家の主人から名を問われた場面である。

お前の名は何といふ。ヘンリーかジョーヂかと言ふから、否私の名は高山で通称「ヤマ」といふと答へると、今度は人の名は大抵意味のあるものであるが、お前の名はどういふ意味かと問ふ。高山とは高い山といふことぢやと答へた。［略］自分は一時高山流水といふ雅号を附けて居つた[5]

額面通りに受け取れば、この書の著者形影生とは高山流水という人物だということになる。しかし、当時の著作家としてこの姓名は他に見当たらない。霞村が高山流水の筆名を使っていた可能性もあるが、働いていたときにそれを用いるとも思えず、また、この図書に略歴などが一切付されていないこともあわせ考えて、文学的な韜晦であると考えるべきであろう。

いっぽう、霞村が少し後の大正八年から主宰した雑誌『からすき』には、すでにその創刊の年から形影生の名が見えている。[6]

また、霞村は、形と影との関係について『面影』の中で触れていることも、形影生が霞村であることの傍証になるかもしれない。

影が形か形が影か。憂きが楽、たのしみがうき。[7]

仁一と参次とは兄弟である。をり〳〵は兄弟嘩喧（ママ）をすることもあるが、形と影の相伴うて、村の端れの学校へ毎日弁当提げて通うて居つた。[8]

さらに、『からすき』と『米国苦学実記』とで共通する記述が見られる。

『からすき』に、

桑港で日本人のボーイが雇はれてをる家でお上さんの料理の手伝をしてをつた時ストーブの火が消江たのでお上さんが『ファイヤ、イズ、ゴーン、アウト』（火が消江てる）と言つたら其ボーイがホエヤ（何処に）と窓の外を窺いたといふ笑話がある、[9]

とあり、同じ内容が『米国苦学実記』に、次のように記されている。

また或るボーイは主婦がファイア、イズ、ゴーン、アウトと言つたので、ホエアと窓の外を覗いたといふことである。[10]

以上を総合的に判断すれば、形影生とは青山霞村であり、『米国苦学実記』はその著作であると判断して間違いない。したがって、そこから事実を導き出すことができるはずである。

霞村が『からすき』に書いた多くの文章にも伝記上の事実に関する多くの情報が含まれている。にもかかわらず、これらが使われずにきたことは訝しくさえ思える。

3．霞村の生まれた家

霞村の出自について、河野仁昭は、「生家の家業は明らかでないが、かなり裕福な農家だったのではないかと思う」と記している。[11]この判断で間違いないであろう。先にも挙げた、おそらく自筆の「略歴」に、「病気で草山に帰耕し、数年間大根を作つたり詩歌を作つたりしてゐる」とあることからもそう推測される。[12]また、帰郷後の生活については、次のようにも書いている。

ある人病気のために十九歳の暮春、花の散ってしまった頃霞ヶ谷に帰り、家の周囲の畠を耕して体軀を鍛へ直さうとした。[13]

ここに書かれた「ある人」とは、『京物語』およびその続編で、霞村が自身を指す呼称として使っている語である。

少し後の事情について次の説明もなされている。

兄は文士の晴耕雨読のやうな事では本物の農夫になれるものでもなし、多少の月給にありつけば、父兄が家倉に飯米位はつけてくれるからと棄てた道に立返り、教師になった。[14]

また、『米国苦学実記』は既に見たように、記載事項のすべてが事実とは言えない書物だから額面通りには受け取れないが、次の記載がある。

自分は元来貧家の生でない。[略]自分の家は自慢するではないが、血統をいへば、人が縁談に、あの家の親類なら大丈夫だらう、といふ程で、他の標準となる家柄である。父は村の名誉職を勤め、府会議員をして居ッたこともある。現に家兄は大都会に接した二千戸に余る大村落の村長さんである。父以来の清廉と剛直とで、村政までを腐蝕して来た醜分子の掃蕩に力を尽して居る。何か議員の選挙となれば、候補者や運動者が門へ車の轅棒を下ろす。故に大きくいへば我国の中等社会、小さくいへば村の上層に位する家である。[15]

余が家は余が幼時には、常に二三人の雇人即ち手代丁稚農男等と、二人の下女を使って居った。近来は二人の下婢のみである。余自らは下婢を虐待し酷遇したとは思はぬが、随分勝手気儘に下女を使ったのである。また時々彼等を怒り彼らを叱罵したことは少くない。[16]

別のところでは、こうも書いている。

これでも父は村の戸長を勤めたこともあり、府会議員になってをったこともあり、村で第一の名望家である。宅地だけでも七百坪からあり、その周囲の田畑もみな自分の家のもので、冬になれば二百俵位の小作米が米倉へ運びこまれる。家をもつなら父兄が何時でも立てゝくれるし、その上三人や五人の家族が食ふ飯米もつけてくれる。[17]

こうした記述から、豪農だったことが想像される。また親族の間の話としては質業を営んでいたとも伝えられている。しかし、後には零落する。

4．口語歌の創始者は誰か

長じて霞村は地元の小学校を経て同志社予備校に進み、同志社の普通学校に明治二一年から二四年六月まで在学した。[18]その後進んだ関西学院、東京専門学校などでの就学等の詳細については不明な部分が多い。[19]ただし、関西学院については、明治三一年に卒業しているのかもしれない。関西学院中等部が出していた雑誌『新星』第三号の「同窓会消息集」に霞村が『深草の元政』を発行し、関西学院に寄贈した旨が記され、別のページに川並秀雄がその紹介記事を書いているのだが、霞村の名の下に「(明三一)」と明記してあるからである。[20]

この関西学院時代に口語歌を創始した。その経緯については、霞村自身が書いている。

丁度二人の宣教師の帰国を送った。一人は学校の先生で一人は曾て英語を習った女宣教師であった。[略]先方に解るやうな言文一致の新体詩を作りその一を送別会の席上で朗読し文体が珍らしいので非常な喝采を博したと記憶してをる。そしてそれを学校の雑誌に掲載した。これは神戸の関西学院での事でその雑誌新星は論文は永井柳太郎等が重もに書き文芸部は詩歌漢詩まで筆

に任せて自分が書いてをつた。口語で詩が作れるからは五音七音の歌も同様だと一週間程して口語歌を作つた。それは『左様ならこれで長らく別れましやうたゞ消息よ絶江ずゝ〳〵に』『朝な夕な出入る黒船ながめては遙々いんだ人をのみ思ふ』でこれが私の最初の口語歌である。[21]

異国人である宣教師にもわかることばで別離の情を歌にしようとすれば文語ではなく、口語にならざるをえないという発想で作ったのである。その雑誌は『新星』である。掲載誌については日比修平も指摘している。[22]なお、関西学院でというのは、「たぶん普通学部の生徒としてである（高等学部が設けられるのは明治四十三年）」と河野仁昭は推定している。[23]

霞村が口語歌を初めて作った時期は、初期口語歌人西出朝風と先後を争う早い時期のことであった。朝風については、渡邊順三が「口語歌運動の先覚者西出朝風の自ら記すところによれば、彼が最初の口語歌を発表したのが明治三十四年（一九〇一年）十一月、「ミドリ」といふ小雑誌に「青藻」と題した七首ださうである」として、その中の一首「あすからあそこに光るあの星にいたで語らうよ、君とながめて」を紹介している。[24]

霞村自筆と考えられる「略歴」には、「明治三十四年正月関西学院で口語詩歌を創始する」とあり、[25]これが正しければ、霞村は朝風が口語歌を公表する一〇か月前には実作を始めていたようである。

これを引用した文章と照らし合わせれば、霞村は二人の宣教師を送るために、まず言文一致の新体詩を作って関西学院が出していた雑誌『新星』に載せ、それから一週間ほどの後に二首の口語歌を明治三四年正月に作ったことになる。

このことを『新星』で確認しようとしたが、先に引用した昭和一〇年代の同名の雑誌とは別の、明治年間の刊行物である。同誌はどこの図書館にも所蔵されておらず、関西学院中学部にも現存していない。[26]しかし、仮に現存していて確認できるとしても、それは言文一致の新体詩の方であって、口語歌は確認できないであろう。霞村自身が、詩の方は掲載したと書いているが、口語歌は作ったとしか書いていないからである。

口語歌を最初に示したのは、林甕臣が『東洋学会雑誌』明治二一年四月号に載せた文章「言文一致歌」の中で試みた作が最初ということになっているから、[27]霞村と朝風の先後にさほどの意義は見いだせない。『池塘集』という書名で明治三九年一二月二〇日に口語歌集を出版し、まとまった形で口語歌を発表して先行したのが草山隠者＝霞村であったことを確認できれば充分である。

5．アメリカ留学

その後霞村はアメリカに留学する。その事情について、次の記述がある。

米国遊学の時、最初から研究する積りで行つたので幸に大体が解り、西詩の構成と漢詩の構成との同じことに興味を感じ、日本の広義でいふ歌も音数の反復律から成ることから、世界を通じて詩歌は同一原理に立つことを悟つた。[28]

ところが、どの学校で研究するつもりだったかは日本を出発するときには明確でなかったらしい。次の文にその事情が見てとれる。

余はスタンフォールド大学へ行けと上陸の後勧められたから、その考であつたが、同地に悪病が流行したことを聞き、且つ稍ゝ遠方であるから、何と

なく厭な気持がしたのであつた。然るに該大学の某氏から、是非来いといふ手紙が今日来た。[29]

スタンフォード大学へ行くことを決めたのは上陸後のことだった。言わば、当てもなくアメリカに渡ったのである。『米国苦学実記』はアメリカでのアルバイト労働の大変さを克明に記した著作である。まずは宿所と食事を確保することが先決、そのような時代だったのであろう。一方、滞米の予定期間が別のところに書かれている。家郷からの初めての書簡に書かれている妹の歌である。

山をこえ海を渡りて三とせ後花をかざしてかへり玉へよ[30]

三年という年限を、最初から決めていることがこれでわかり、どことは決めていなくても、大学に入ることは当初からの計画だったことがうかがえる。

スタンフォード大学で学んでいたことは先の引用でもわかるが、他にもいくつかそれを示す資料がある。

菱の冠黒の袖衣学堂にシニアの君を美くしとみし
シニアは四年生なり以下スタンフォールド大学にて咏める[31]

池塘集の巻頭の十春詞はス氏大学のカツレツヂ・ターレスにゐた時の作である。[32]

スタンフォールド大学など午食時になると、中庭の木の蔭や少し離れた教室の庇下で、男女の学生が弁当を食ひ林檎を剝いて居るのは常である。この図書館ではトーストイを主に読んだ。[33]

米国は到る處の小市邑に小さき大学がある。［略］私の居つたカレッヂは此の種の学校で、米国中部の大原野、戸数は千に足らぬ小邑に在る。[34]

帰国後に書いたものを見ると、こう書いてある。

自分は米国を去るに臨み、ウェブ教授に一書を送つて二つの願望を告げた。一は多年企図して居つた通に、日本に口語詩を成立せしめること、一はシャロット・ブロンテーを紹介することであつた。[35]

留学時には詩を含む英文学を学んだということになるのだろう。しかし、病気のため学業を断念し、中退して帰国することとなった。

6．京都新聞の持主

霞村が大正初期に京都新聞の「持主兼記者」だったという記述は、『明治文学全集』六四「明治歌人集」（昭和四三年）に収められた年譜に見られる。しかし、その後に刊行された、『現代短歌全集』一巻には、単に「京都新聞記者などをつとめ」とあるだけである。後者の年譜を作成した新間進一が「持主」を疑った結果と推察される。しかし、霞村自身が記述したと思われる改造社版の『現代短歌全集』二一巻の「略歴」にすでに「持主兼記者」と書かれている。『明治文学全集』の「年譜」はそれを忠実に引用したのである。

河野仁昭は「『京都新聞』の「持主」になるまでの関係は詳らかでない」として、さらに、文筆の才能を買われて、「紙面の刷新を図ってもらうということだったのか」と書いている。[36]では、実態はどうだったのか。答えは霞村自身の書いた回想に明確に記してある。

大正三年長い歴史のある京都新聞が保証金まで食つてしまつた窮境に陥つてをるのでその持主になつてくれとある仲介者が家兄に申込んできた。［略］家兄はその意はなかつたが私は自分の目的を達する一助にもなると思ひ、また当時無職であつた自分が何か仕事となる端緒にならうと思ひ、二人して承諾することになつた。この新聞で被つた損害は大した事ではなかつたが家兄がその仲介者に誘はれて新聞と無関係の製造業をやり、家が覆滅したと人から思はれたやうな大損失（ママ）が招いた。執達吏に踏込まれる。旧宅新居の敷地が役場で競売せられる、それを阻止するため自分がその場に臨まねばならぬ悲惨な目にあふ。この厄難で私は愕然目がさめた。[37]

これが、持主となることを引き受けた真相であった。頼まれて兄と共同の持主兼記者となったのである。多少の財産を持っていると目された兄弟が新聞社の立て直しを依頼され、兄はさほど積極的ではなかったが、霞村の方が、おそらくは自作の発表の場としても役立つと考えて関わったものである。

『京都新聞』という名の新聞は少なくとも三回発行されており、中でも昭和一七年に『京都日出新聞』と『京都日日新聞』が合併して成った『京都新聞』は現在につながっているが、霞村が関わったのはそれではなく、また、もちろん明治四年から六年にかけて刊行されたものでもなく、明治二九年創刊の『京都新聞』である。[38] 河野も同じ見解を示しており、しかも「堀江松華が創刊したものである」との情報を加えている。[39] 同紙の発刊については、新聞報道もされた。

京都に於ける日刊新聞ハ従来日出新聞のみなりしが同社の堀江純吉氏ハ今回退社して更に同氏社長兼主任となり御池通間の町東入処に於て「京都新聞」といへる日刊新聞を発刊することゝなり既に此程京都府警察部へ届け出で来る二十五日初号を発兌する筈なり今此新聞の成立を探訪するに全く伊東巳代治男の機関となるものにて其資金も悉く同男の手より出でたるものなり[40]

しかし、この新聞は大正五年には刊行を休止している。兄弟が関わったのは、長く見ても二年足らずであった。当時の『京都新聞』の所蔵機関が見当たらず、廃刊の事情は不明であるが、経済的な理由を推測しても大きな誤りにはならないであろう。

霞村は別のところでも次のように『京都新聞』に触れている。

元京都新聞社長だった堀江純吉氏が長逝せられた。氏は徳富蘇峰氏と従兄弟である。浅田江村鵜崎鷺成（城）大森痴雪武林無想庵等新聞社時代の門下生が多い。[41]

同新聞社は、大正三年一二月の時点で京都市上京区麩屋町二條下ル尾張町から京都市上京区下立売通堀川東橋詰町一六八に移転した。当時の新聞一覧である大正四年版『新聞総覧』には次のように紹介されている。

基礎堅実、紙面整頓、評論報道亦た穏正機敏を以て称せられ発行部数頗る多し、近時経済上の記事に最も力を注ぎつゝあるを以て、商工機関として府下人士の信頼を博するに至れり。由来同社は現社長堀江純吉氏の独力経営の下に業を創めしものにして、其間毫も助力を他に求めず、政党政派の係累を避け、而も着々事巧を挙げ、光輝ある奮闘努力の歴程を経て盛況を来せしもの、一に同氏の経営其当を得たるに職由せずんばあらず。[42]

ここに見られるように、この時点で社長は堀江純吉であり、翌年版では「大正五年二月堀江氏引退せられ、森田茂、吉倉佳三郎両氏の経営に移り」[43]

とあり、青山兄弟の名はどこにも示されていない。この点はさらに調査の必要がある。

ここには政党政派の係累がないように書かれているが、同じところに「政派関係　立憲同志会」と明記されている。[44] また、先に掲げたように、伊東巳代治との関係があったようである。社長兼主筆が堀江、「編輯長兼硬派主任　塚本廉　軟派主任　須古清」であった。

霞村と兄との関係は先の引用にも書かれているように、微妙なものがある。新聞社経営の失敗のためばかりとは限らないが、兄の和造[45]は種々のことに手を出して財産を使い果たしてしまった。[46]「いくたびか兄弟の信義裏切られそれを宥してゐる私です」[47]の歌を霞村は残している。

新聞社で記者の仕事をしていたことは次の記述からも明らかである。

> ある人が京の新聞社へ通うてをつた時である。維新前祇園（ママ）にをり、才色双絶で知られた女性の事蹟を調べるために、四五軒の貸座敷や置屋を狭斜の巷に訪ねた。何分古い談だから中西君尾といふ老女をも尋ねていつた。[48]

> ひと歳西本願寺のお代理様が永年契つた、小共もある女をふり棄てゝ華族の妹を娶つたので、その女が損害賠償の訴を起したことがあつた。その頃ある新聞の持主兼記者であつたある人はその訴訟を傍聴しやうと、時間に法廷へ入つて待つてをつたが、[49]

霞村は、インタビューや裁判の傍聴等、取材活動もしていたのであった。

7. 家族

霞村は生涯独身を通した。病身だったことが主な理由としてあっただろう。きょうだいとしては、先に見たように兄和造がある。「姉」が登場する歌があるが、義姉のことであろう。実姉ではない。「懐疑（うたがひ）を叱りなだめて萩の径われに道説く姉があつたら」[50]の歌は、姉がいなかったことを示すものである。弟のいた様子も見られない。妹がいたことを示す資料は多数ある。中でも、「妹の手紙」のタイトルを付した「続京物語」には、次の記述が見られる。

> 廿一歳の徴兵検査の年はもう学業で身を立てることは全く断念めてをつた。丁度その年第三の妹が八歳になつて村の小學校へ入門した。[51]

これによれば、少なくとも三人の妹がいたことが明らかになる。ここに書かれた妹はのちに「人に嫁し小児の母になつた」という。そして、二十年近く経ってその家を訪ね、夕食風景を見、「雁もどき外の児が取つたとすねてゐる牧師の家のややこしい夕飯」（「続京物語」の表記）という歌を詠んだ。すなわち三番目の妹は牧師に嫁したのである。

> わが笑に涙もまじる鳥が啼くあづまへ小さい妹をやつて
>
> 以下四首妹を送つて
>
> 髪撫でゝ愛でゝをしへていましめて廿六年この日別れる[52]

この妹とは、明治二〇年七月一九日生まれの第三の妹ミチである。ミチは大正二年一月東京の牧師和田信次に嫁した。このとき数えで二六歳であるから、年齢も合っており、ミチを詠んでいることは間違いない。[53]

妹について触れた文章はいくつかある。「ある人の妹が零落して北大阪の地にすんでをつた時」に、同じ棟続きに住んでいた女性がまたいとこだと判明するようなことがあったという。[54] また、妹が早世したように見える歌がある。

砂弄りしてると日記にかいた妹のわすれがたみもはたちを過ぎた[55]

これらはそれぞれ何番目の妹か。どちらも三番目ではないことは間違いない。二番目だろうか。三番目の妹は、先に挙げた、アメリカ留学して初めての日本からの手紙にも登場した末の妹と同一人物であろう。

季の妹が「とつ然門先よりゆふびんの声聞えしは六月十三日午後二時頃なりき、母上と姉上と走り行きしに兄上様のなれば、急ぎ封を切り姉上読まれしにより、母上と私と傍にありて聞き居りしに安着云々」と吾が第一信の着した有様を精しく書いて居る。まだ十三歳の子供なれば、あまり沢山にすれば印紙を沢山にはらねばならぬ故」といふかと思へば「此の歌自作にて不完全なればよろしく直して下され度」といふ様な六かしいことを書いて居る。[56]

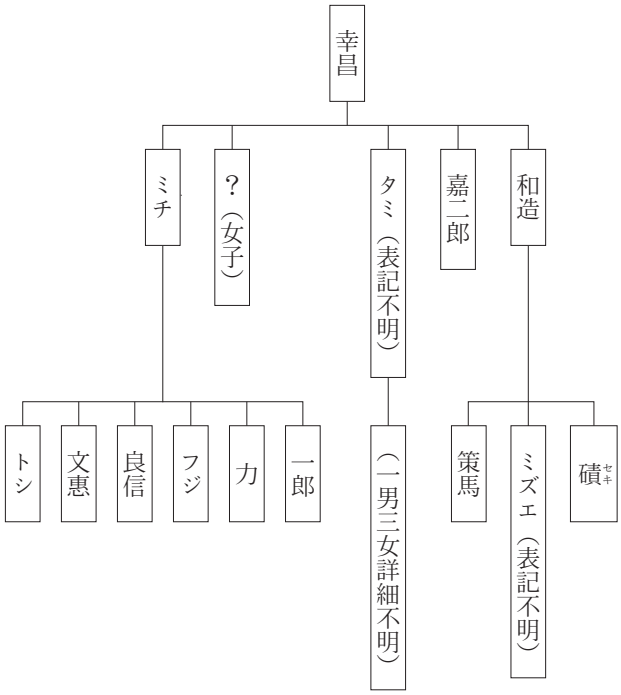
ついでながら、ここに出てくる姉も義姉と考えられる。義姉については、「嫂にその姉の舅の七十七歳の祝の歌を乞はれ左の歌を短冊にかくその人は宇治の茶問屋の隠居である」[57]と書かれている。また、「あによめは御茶師の娘縁つづきしるべの多いこの宇治里」[58]の歌も詠んでいる。

ミチは六人の子をもうけた。ミチの名は、多くが自費出版である霞村の著書の発行者として何冊かに記されている。『京物語』には「和田みち」の名があり、その住所は「東京府豊多摩郡渋谷町字代官山十一番地」である。刊行が「昭和五年九月二十日」になっているが、ちょうどこの年からこの地に住んだ。その五年後に刊行された『霞村長歌集及詩選』[59]の発行者も同様である。ただし、住所表記は「東京市渋谷区代官山十一番地」に変わっている。

霞村は明治七年六月七日生まれ、ミチとは一三歳の差がある。「続京物語　妹の手紙」での霞村と末の妹の歳の差は、先述したようにぴったりと合っている。それに対して、『米国苦学実記』で日本から最初の手紙が到着したのは明治三六年六月一三日であるから、霞村は満年齢で二九歳、ミチは一六歳になる少し前のはずである。ところが末の妹は一三歳と記してある。文学的効果としては、「十三歳の子供」にしておいた方が、その健気さが一層増すという作為があるかもしれない。もっとも、先に引用した歌で、結婚する二六歳の時点で「小さい妹」と書いているのを見ると、無意識裡の誤記とも考えられる。

ここでは詳述しないが、兄和造に娘があったことをうかがわせる歌があり、息子二人のうちの二番目策馬（さくま）は霞村の養子となった。

現在判明しているきょうだいの系図を記しておく。



＊嘉二郎のきょうだいおよびその下の世代までの系図である。和造の娘ミズエ（表記不明）は磧より年上の可能性もある。

8. 終焉

霞村は昭和一五年二月に死去した。霞村の弟子筋にあたる上田穆はこう書いた。

> 明治の末期に口語歌を創始した霞村青山嘉二郎翁は京都市深草枯木町の自宅で病気療養中去る二十七日逝去した、享年六十七、葬儀は七日午後二時から市内富小路下に京都キリスト教会で施行する云々――といふ記事を三月六日の新聞で見た。[60]

死去の日付については『京都教会百年史』所引の「京都教会（四条教会）永眠者名簿」でも上記と同日が記されている。[61] ところが、同志社から刊行された『追悼集　Ⅶ　同志社人物誌』では「二月廿六日午後二時永眠」と書かれていて一致しない。[62] おそらくは最後のものが誤っているのだろうとは想像されるが、確定できない。葬儀には親友永井柳太郎が弔辞を寄せ、佐佐木信綱が追悼の歌を送った。蔵書は同志社大学図書館に寄贈された。[63]

その人となりについて、上田穆は「物質的にも屈託なく、生来の茶目気と楽天的なところから、時にふれて甚だ機智とフモールとを漂はすことが多かつた」と同じ文章で記している。

9. おわりに

霞村は一貫して口語による短歌を主唱した。文語では異国人には意味が伝わらないという理由だったが、それとともに、文語で作ろうとしても当時の歌人ですら、すでに破綻をきたしているから、無理のない口語によるべきだという点がもう一つの理由だった。霞村の著書に『擬古文辞　破綻一覧表』がある。[64]〈表紙四〉までノンブルが付けてあって一一頁の小冊子である。名家の作になる短歌を取り上げて、いちいち文法的破綻を示してみせたものである。

これは霞村が大正一五年一月一六日に東京で行われた口語歌人大会で配るために一〇〇冊ほどを京都から持参したものである。[65]

霞村は口語短歌を主唱したものの、定型にはこだわった。自由律の立場を取らなかった。それでも当時としては先鋭的見解であったために、何度か論争を行っている。福士幸次郎との間には『短歌雑誌』上で度重なる応酬があった。[66]

河野仁昭は、「［短歌は現代のことばで詠まれるべきことを強調していた土田］杏村と霞村のあいだにどのていど意思疎通があったかは詳らかでない」と書いている。[67] その杏村との間にも論争があった。[68]

論争を通じて霞村の口語短歌観を解明することもできようが、まずは伝記に関わる事実調査を進める必要がある。解明できた事実はまだごく一端である。

注

1　河野仁昭「同志社人物誌　六一　青山霞村」『同志社時報』八四号　昭和六三年三月二五日　一〇三～一〇七頁。

2　河野仁昭「青山霞村」、『京都の明治文学―伝統の継承と変革―』白川書院　二〇〇七年一月三〇日　二〇四～二二七頁。

3　『現代短歌全集』一巻　筑摩書房　一九八〇年一二月二〇日　三七八頁。

4　『現代短歌全集』二一巻　口語歌集・新興短歌集　改造社　昭和六年九月一五日　三五八頁。なお、『昭和歌人名鑑　昭和五年版』紅玉堂書店　昭和四

年一二月一日　五頁にも正しく記載されている。また、『明治文学全集』六四　明治歌人集　筑摩書房　昭和四三年九月二五日　三九六頁の年譜にはこの書についての記述を欠く。

5　形影生『米国苦学実記』内外出版協会　明治四四年七月一五日　一八二頁。なお、刊行日は一四日と印刷された「四」を手書きで五に修正し、訂正印が捺してある。同書は国立国会図書館の近代デジタルライブラリーで閲覧可能。http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/809598　二〇一五年五月四日閲覧（以下、閲覧日はこれに同じ）。

6　形影生「処女詩人　江馬細香　湘夢遺稿を読む」、『からすき』四号　大正八年九月五日　六頁。これより前の号は所蔵機関が見当たらず未見。

7　青山霞村『面影』梅竹書屋　大正元年一二月八日　五五頁。

8　同右　一二五頁。

9　「言葉の間違」、『からすき』七号　大正九年三月三日　二〇頁。無署名であるが、雑誌の主宰者霞村の筆になるものである。

10　前掲『米国苦学実記』一六五頁。

11　河野仁昭　前掲「青山霞村」二〇四頁。

12　「略歴」、前掲『現代短歌全集』二一巻　三五八頁。

13　青山霞村「続京物語　妹の手紙」、『短歌研究』八巻一号　昭和一四年一月一日　二〇一頁。

14　同右。

15　前掲『米国苦学実記』自序　一〜二頁。

16　同右　七七〜七八頁。

17　青山霞村『京物語』警醒社　昭和五年九月二〇日　一一五頁。

18　河野仁昭　前掲「同志社人物誌　六一　青山霞村」一〇三頁。

19　河野仁昭　前掲「青山霞村」二〇五頁。

20　「同窓会消息集」、『新星』（関西学院中学部）三号　昭和一一年七月二〇日　五六頁。川並秀雄「青山霞村氏新著「深草の元政」を読む」、同三一頁。なお、関西学院は創立当初は神学部と普通学部の二部から成っていたが、普通学部が大正四年になって中学部と改称することになった（関西学院七十年史編集委員会編『関西学院七十年史』関西学院七十周年記念事業中央委員会　一九五九年一〇月　三五九、三六五頁）。

21　「口語歌と私」、『からすき』四二号　大正一五年二月三日　二頁。無署名。

22　日比修平「明治大正口語歌運動」、『水甕』一八巻一号　昭和六年一月一日　九一頁。

23　河野仁昭　前掲「青山霞村」二一五頁。河野は「どういう作品だったかは確認のすべがない。『池塘集』には収録されていそうにないからだ。」と同書二一六頁に書いているが、先に引用した文には明記されており、また、これらの歌は『池塘集』初版九頁に収録されている。

24　渡邊順三『史的唯物論より観たる近代短歌史』改造社　昭和七年一二月三一日　一九〇頁。

25　「略歴」、前掲『現代短歌全集』二一巻　三五八頁。

26　関西学院大学図書館に問い合わせたが、図書館および学院史編纂室に所蔵なしとの回答を得た。さらに、関西学院中学部に所蔵されていないかとも考えて、念のために同校に問い合わせたが、やはり所蔵なしとの回答であった。

27　渡邊順三　前掲書　一八九〜一九〇頁。

28　青山霞村『詩歌学通論』からすき社　昭和九年六月一五日　「巻頭語」。近代デジタルライブラリー http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1023824　なお、河野仁昭は前掲「青山霞村」の二〇六頁でこの部分を引用して、「最初から（詩）を研究する積りで行ったので」と、「（詩）を」を補っているが、原文にはない。

29　前掲『米国苦学実記』一一五頁。

30　同右　八〇頁。

31 草山隠者『池塘集』草山廬　明治三九年一二月二〇日　六九頁。
32 前掲「口語歌と私」二頁。
33 前掲『米国苦学実記』四六頁。
34 同上　二一四〜二一五頁。
35 青山霞邨『英国の青鞜女　ブロンテー女史』敬文館　大正二年五月一一日
自序一頁。近代デジタルライブラリー　http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/947516
36 河野仁昭　前掲「青山霞村」二二四頁。
37 霞村「からすき五十号の回顧」、『からすき』五〇号　一九二七年　三頁。
38 「京滋マスコミ系譜試図」、京都新聞社史編さん委員会編『京都新聞百年史』
京都新聞社　昭和五四年一二月二〇日　五一七頁。
39 河野仁昭　前掲「青山霞村」二二三頁。
40 「伊東男の新機関新聞（京都と大坂）」、『読売新聞』一八九六年一一月四日
二頁。
41 青山霞村「深草から」、『からすき』六九号　昭和四年四月一五日　四頁。
42 『新聞縦覧』大正四年版　日本電報通信社　大正四年九月三〇日　四〇六頁。
近代デジタルライブラリー　http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2387636
43 『新聞総覧』大正五年版　日本電報通信社　大正五年八月三〇日　四六二頁。
44 同右　四六二頁によると、政派関係は「純無所属」と変更された。
45 「ある人とその兄とは年が僅か二つ違であつた」と前掲『京物語』七五頁に
ある。
46 前掲『京物語』一六二〜一六三頁にも詳述されている。
47 青山霞村「硯清」五首のうち『からすき』六三号　昭和三年一〇月一五日
一頁。
48 青山霞村「続京物語　井上馨侯の命を助けた鐘の贈主」、『短歌研究』八巻六
号　昭和一四年六月一日　一二八頁。
49 前掲『京物語』九〇頁。
50 青山霞村『池塘集』からすき社　大正七年一一月一日訂正再版　二〇頁。
51 青山霞村「続京物語　妹の手紙」、『短歌研究』八巻一号　昭和一四年一月一
日　二〇一頁。
52 青山霞村　前掲『池塘集』訂正再版　一三〇〜一三一頁。
53 私事ながら青山（和田）ミチは筆者の祖母に当たり、その生年月日は、筆者
の母文惠による。
54 青山霞村　前掲『京物語』四七〜四九頁。
55 青山霞村『霞村長歌集及詩選』素人社書屋　昭和一〇年五月五日　一九八頁。
56 前掲『米国苦学実記』七九〜八〇頁。さらに、三番目のミチの家で詠んだ、
「がんもどきほかの児が……」の歌を先に挙げたが、この歌を含む、同じ時
に東京で詠んだ四首の中にある一首「わかいとき似てもゐなんだわがすぐの
妹にみえる母の面影」（青山霞村「枯木集」、『現代短歌全集』二一巻　口語
歌集・新興短歌集　改造社　昭和六年九月一〇日　三五四頁）はさらに混乱
を起こさせるが、これは妹タミのことと解すべきか。
57 青山霞村　前掲「深草から」、『からすき』六九号　四頁。
58 青山霞村「宇治と嵯峨」、『からすき』五一号　昭和二年六月一〇日　二〇頁。
59 青山霞村　前掲『霞村長歌集及詩選』奥付。
60 上田穆「悼青山霞村」、『日本短歌』九巻四号　昭和一五年四月一日　一三五
頁。
61 「京都教会（四条教会）永眠者名簿」、日本基督教団京都教会百年史編纂委員
会編纂『京都教会百年史』京都教会　一九八五年一月一五日　八四三頁。
62 同志社社史資料室編刊『追悼集Ⅶ　同志社人物誌　昭和十三年〜昭和十八年』
一九九四年二月二八日　七三〜七四頁、初出は『同志社所報』四五号　昭和
一五年三月。
63 同志社々史々料編集所編『同志社九十年小史』同志社　昭和四〇年一一月二

九日　四八二頁。

64　青山霞村『擬古文辞　破綻一覧表』からすき社　大正一五年二月一日。

65　上田行夫「口語歌人大会と其前後」、『からすき』四二号　大正一五年二月三日　一五頁。

66　福士に対する霞村の反論は『短歌雑誌』四巻七号（大正一〇年七月一日）に「福士氏の駁論を読む」として掲載され、同誌五巻四号に福士「青山霞村君の妄言」が載って編集サイドから論争にストップがかかるまで数度の応酬があった。

67　河野仁昭　前掲「同志社人物誌　六一　青山霞村」　一〇五頁。

68　霞村の土田杏村批判は、「土田杏村氏の奇言と俗論」『からすき』五七号（昭和三年四月一五日）などに見られる。

＊調査にあたっては、東京大学近代日本法政史料センター（明治新聞雑誌文庫）、同志社大学図書館、関西学院大学図書館、関西学院中学部長　安田栄三先生のお世話になった。関係の皆様にお礼申し上げます。

＊文献の引用にあたって、旧字は概ね新字に改めた。

＊本稿は、二〇一五年二月一八日に、昭和女子大学日本文学研究会において最終講義として発表した内容をもとに大幅に加筆したものである。

（なかにし　ゆたか　現代教養学科）